

生物多様性に与える植食者の影響評価： 進行状況と来年度の予定

揚妻直樹・揚妻芳美・辻野亮・日野貴文

目的

自然林・植林地帯における10年～15年間の草食獣の動態を把握する。また、自然林におけるシカの環境利用に関する情報を収集する。これらにより草食獣個体群の動向と、彼らにとっての森林の評価を行う。一方、亜高木～高木については10数年間、実生・稚樹については5年間の変遷を追跡し、森林に対するシカの影響を評価する。

2003年度（予定していた調査）

1・自然林において、シカ・サルの生息密度をルートセンサスなどで調査した。

＝データを蓄積後分析予定。

2・自然林において、シカの土地利用をテレメトリー法により、採食行動を個体追跡法により調査している（継続中）。

＝土地利用は分析中。オス対象個体が少ない。

＝1年分のダイエツトについては分析終了。2年目のデータ採集中。

3・10数年前に設置してある自然林内の毎木調査プロットの再測をした。

＝データ分析中。

4・防鹿柵を自然林と植林地帯に残された広葉樹林分に設置した。柵内外を毎木調査・食痕調査・フン密度調査をした。

＝柵の設置、内外の胸高直径1cm以上の木本調査終了。

＝実生調査については冬に調査予定。

（追加調査）

5・自然林と植林地帯における実生密度の変化

＝1998年に調査した場所の再測。

2004年度予定

1・調査を継続

2・調査を継続

3・補足調査

4・実生調査（再測）

5・シカ柵を中標高自然林に設置予定（高度差・自然林・植林地帯）

6・植林率の異なる中標高の4地域においてシカとサルの生息密度指数を求め、約10年前に行った同様の調査の結果と比較。